

Title	現代神道概説(古野清人著, 山喜房出版部發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.151- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

顧るに、この學問を研究するに困難なることは、時代を経るに従ひ民族の風俗、習慣、生活様式、言語が徐々に或は急激に變遷する事にある。舊來行はれしものが衰微し終には亡ぶ事は當然である。故にそれら民族の風俗、習慣、生活様式に關する資料を蒐集し完全なるものとする事が現在の急務である。しかして今迄の記録の整理並に計畫的研究觀察を以て昔より存せる切々の資料を蒐集し將來の人々のために忠實に記すことが大切である。

此に紹介する本山桂川氏の「民俗資料類纂」が上記の目的のもとに逐次編纂せられつゝあるものにして、著者は困難なる索引の完成に努力せられつゝある。既に第一冊は三月中旬は刊行された。

民俗資料類纂の著者本山桂川氏は次の如く述べられてゐる。

「民俗資料の採集と探求とは今や異常なる發展を示して参りました。今後夫等各部門各項目に亘る系統的専門的研究が益斯界に要求されるのは必然であります。此の際お互研究上の無駄を省く爲めにも、既に發表され又將來續々發表される民俗資料の分類整理をつけて置くことは差迫つての急務であらうと考へます。依つて先づ近世期に於ける新舊刊行本、未刊行本並に新古各種の雜誌其他必要の文献を渉獵し一々其出所、筆者、發表年月日等を明記し、記事の内容を分類編纂して逐次之を刊行頒布しようと思つてました。其分類方法は概ね日本社會事彙や廣文庫の様式に倣ひ、五十音大別の下に更に小類別を設け各項共に追加挿入の出来るやう編輯致します。例へばアの部アイの項にはアイヌに關する民俗資料が類別され、イの部イナの項にはイナウイナリ等に關する民俗資料が類別登載されます。即ちこれ

を分割すれば五十音各項別民俗資料カードとなり、之を集積すれば類別民俗事彙の一大集成を形作るわけでありませう。

以上に依つても此の仕事は非常な努力と多大な時間と熱心と根氣を傾けなければ完成され難き性質のものである。

最後に刊行せられし「民俗資料類纂」の「第一冊」の目録を記せば左の如し

アの部 その一

「アイゴノツカ」(愛護ノ若)

「アイヌ」

アイヌの衣服、アイヌの飲食物、アイヌの住居(家居)、アイヌなる名稱、アイヌの信仰生活、アイヌの婦人、アイヌの婚姻、アイヌの出産、アイヌの命名、アイヌの鬚髻、アイヌの熊祭(熊途)

以上が内容である。

(昭和六、三、一九、宇宿 捷)

現代神道概説

(古野 清人 著)
(山喜房出版部發行)

著者は、田邊壽利氏に依れば、(讀賣新聞二月二十四日、二十五日所載)現代に於ける宗教研究の社會的意義(參照)デュルケムの劃期的大著「宗教生活の原初形態」(前半)の譯者であり、しかも該書の譯者として適任である、單なる社會學者でも單なる宗教學者でもない有力なるデュルケミアンであり、又東大宗教學科の生んだ麒麟兒でもある。

筆者は決して神道の専攻者ではない、それ故その教派神道に對する理解も淺薄にして不備たるを免れない、にも拘はらずこの書の刊行を企てたのは、十三派神道の如き所謂 minor religions の研究は宗教學に於て看過され勝ではあるが、而も重要な一課題であることを信ずるからである。吾らはこれらの教派を en masse に取扱つてみて、これらの宗教は殊に十九世紀後半に於けるわが國の民族精神の高揚及び人心の不安動搖によつて發生又は助長されたこと、また各教派はその發生の當初に於ては概して奇蹟的又は迷信的要素に富んでゐたことを示唆される。

これは序に於る、本書の成立の事情に對する著者の述懐である。著者は先づ、第一章に原始神道の始原と發達と題して、信仰及びその外的表現である宗教は、恰も生物の一個體に於るが如く、遂に懷滅枯死するに至るまでは、生成の流轉不斷の發育と生長と變化とをやめないものである、(傍點筆者)この見地に立つて、宗教としての神道もこの原則に洩れず、それは一、所謂太古の時代から奈良朝の初頭に至る氏族に固有な神道觀念を持續してきた時代、二、奈良朝より明治維新創業の際に及ぶまでの、道教佛教儒教などの外來の宗教思潮や儀禮を習合し混淆し來つた時代、三、維新以降、神佛分離が行はれて神道に強く國教的色彩を加味せんと努めた時代、の三大時期に區劃して考察することを便宜させられてゐる。然し乍ら先づ上古の根本の神道思想とは如何なるものであるか、換言すれば原始神道の如實の姿如何と云ふ難問には著者も少からず惱されたものの様であるが、結局、大和民族は崇拜の對象としてゐるものを總括して「神」と呼ん

だが、この神々々は寧ろ靈魂の意に近いもので、この神の觀念の發達がある意味では神道史のすべてである。

と斷じ、斯く斷ずる事に於て或意味の妥協點を見出し、吾等祖先民族の神觀を語り、それは無定形で放漫であつたが、時代の推移と社會生活の發展に伴つて倫理道德上の觀念に平行して發達しこの進化した觀念は、また邪神を避けて善神に崇拜を向ける絶えざる努力を促すと同時に、あらゆる神々を偉大な人格神に統一せんとする熱心なる意圖となつて現れ、斯くして有史以後に至て氏族の守護神、若くは守護靈即ち氏神を中心とする「日神」天照大神の出現となつたのである。とし、第二章近代史上に於ける神道の達化と變遷、に於ては、家康に依て三百年に亘る平和時代の基石が置かれるや俄然神道は、一、儒家神道の發達、二、復古神道の擡頭、三、宗派神道の發達となつて勃興した。徳川幕府は佛教を排斥はしなかつたけれども、時代人の實踐道德の基調として儒教に着眼し、殊に政策上朱子學を以て幕府の正學換言すれば御用哲學としたのである。こゝに於てか一方神道哲學に於ても佛教よりは儒教の要素が勝つたと云ふに止らず、全然佛教を排して儒教の立場から神道を論ずるものが多く現れてきたことも亦已むを得ない當然の歸結といはなければならぬ。要するに近世史上に於てはすべての精神生活の基調は儒教に置かれたので、神道も大にその影響を受けたのであるが、一面に於ては佛教的色彩の濃厚な三論、天臺、法華等の諸神道が依然として相等の勢力を維持してゐたことを認めなければならぬし、更に又儒教も佛教同様排斥して、日本民族固有の精神に依て、あらゆる生活を純潔無垢な原

始に復歸させなければならぬと主張して新に一派を興して儒家神道やその他の神道諸派に反抗したものを、それが復古神道であつたのである。さいつた様に論じ、宗教に於ける復古運動の發生原因を次の如くに規定せられる。

ある一つの宗派が原初の神秘的な昂揚と感激と情熱とを冷却せしめて、單なる死塊と化せんとする時、徒らに儀禮、祭式の末事に拘泥し、その神學上の瑣細な推敲に心を奪はるる時、相容れ難い他宗教との妥協混合に専心する時、期せずして興つてくる運動は素朴純粹な原始の姿へ歸れとの復古的の欲求反動的の運動である

と。著者は更に進んで、徳川時代神道史上、否廣く日本宗教史上頗注目し價する現象は、寧ろ民間に勢力を扶植した、或特定の宗教的天分に豊かな人々が自己の生々しい體驗を通じて純粹な宗教信仰を基として提唱宣傳した神道(或は半神道的)體系が發生したといふことである。即ち一人の教祖を中心として、その信條や信仰の對象をそれに歸依追隨する信徒が遵奉してゆく神道、概して今日の所謂十三派神道がこれである。と叙説し、その神道體系發生の内面的事情を解剖して、

幕末に及んで政府が内憂外患交々來つて、諸種の擾亂に心を奪はれ、これと共にまた久しい間國民の宗教生活を殆んど獨占してゐた佛教が民間信仰の跳梁を嚴重に監視しうる權威を失ふに至つて抑壓されてゐた庶民の宗教心は、俄然として爆發してきた、芽生えてきたこれらの信仰の指導者開祖達はわが國民の準本能となつてゐる神道的信仰と多少とも習合した教説を以て、信徒を組織した

させられる。

著者は第三章天理教史の梗概より、第十三章新興宗教と傳道について、に至る迄、教派の信仰、教義、或はその史的考察、或はその分析と批判、に新進宗教學者としての腕の冴えを見せて居られるが、第九章神道修成派、大社教の條第九十頁に於ては、再び教派神道の意義に及んでこれらの教派神道は、實に徳川末期に於けるわが日本の社會的精神的不安や動搖に對する、或ひは狹義には當時の神道や佛教の腐敗墮落精神上の無能力に對する心靈の目醒め、反抗の烽火であつた。吾らはその餘りにも平俗凡庸な教義や餘りにも荒唐無稽な行事のうちにも内部に秘められた時代と民の救済の力強い念願に自ら胸打たるゝものがあることを認める。

と述べられてゐる。

筆者は宗教學に對する明確なる概念を把握し得ないために、單なる内容の紹介(現代神道の宗教學的意義とでもいつた様な著者の方法論的見解)に止り、批評を机上より落して了つた事を大に遺憾とする。然し乍ら宗教學に白紙なる筆者にして、しかもいひ得る事はある。即ち果して宗教心理學と宗教社會學とは十分なる方法論上の可能性を有するものであるならば、著者こそ現代神道を宗教社會學に於て、その方法論的可能性を實證し得る人ではあるまいか

と。唯筆者の机上よりさり落した批評以上に不愉快な事は本書は誤字、脱字が非常に多いといふ事である。第百六頁扶桑教の條の、

長谷川角川は天文十年正月肥前國長崎に生れ、元祿元年（永祿元年の誤なるは勿論）十八歳にして父左近の志を襲いで家を出で云々

の如きはその最も甚しきものである。出版者の良心、否著者の名譽のために再版の訂正を待つ。（四六判本文百四十四頁、定價壹圓貳拾錢）（淺子勝二郎）

雜誌「史潮」の發刊

從來の「史學」「史學雜誌」「史學研究」「史林」「史苑」「史淵」「國史學」「經濟史研究」に加へて、今度東京文理科大學史學研究室を中心とする大塚史學會から「史潮」が發刊されるやうになつた。本誌は研究、書評及紹介、彙報の三欄に分たれ、研究欄には中山久四郎（清朝考證の學風と近世日本）、齋藤斐章（時代の背景を異にせるピスマルクとストレーゼマン）、有高巖（支那に於ける地方自治の由來）、松本信廣（笑ひの祭儀と神話）、松本彦次郎（日本近世文藝復興期の序論）、中川一男（フランスに於ける經濟社會史の發達）の諸氏が執筆されてゐる。又彙報欄は、史學界潮向、史學界近事、學内消息を含み、書評及紹介欄を合せて五十頁、あらゆる方面から斯學會の近況を報告するに多大の苦心が拂はれてゐる。本欄はやがて本誌の特徴の一つともなるであらう。吾人は本誌の健全なる發達を祈ると共に、相提携して斯學の進歩のために力めなければならぬ。

因て本誌は半三回の發行、會費は貳圓と置く。（淺子勝二郎）

「夢殿」

これは美術と信仰誌と題して、（本誌はその第一冊）佐伯啓造氏に依て法隆寺鷓鴣社から發行される雜誌である。今左にその内容の簡單なる紹介を試みることをする。

先づ、谷本富氏は「夢殿と日本佛教」と題して、法隆寺の夢殿は一面聖德太子の三經義疏御製作の本據ともいふべきところであり、一面太子が入定觀念乃至稱名に依て、早くもそこに他日淨土門興隆の種子を蒔かれたところだともいへるさし、佐伯良謙師は

「夢殿と聖德太子」と題して、
太子の夢殿人定は、佛典研究が中心であり、茲にその
太代が研究せられし佛典の内容を考查し又太子が如何に之を時
子思想の上に應用されしやと云ふことを論ずるは、實に本篇の主
題たるのみならず、又太子思想の研究の中心たるものでなければ
ならぬ（傍點筆者）

さし、勝鬘經及び勝鬘經義疏、維摩經及び維摩經義疏、法華經及び法華經義疏の内容を研討せられ、又橋本凝風師は「佛教教理史上より見たる太子と夢殿」に於て、太子當時の支那六朝の佛教は朝鮮半島を経て我國に傳へられたものであるさし、飛鳥朝殊に推古朝を中心とした當時の佛教は少くも支那佛教として輸入されたものであるとして、太子の御信仰佛教を考察し、次に岸熊吉氏は「夢殿の建築」に於て、修補は屢々施されたやうであるが、建築の構造形式に迄變改を加へたと認められるものは、建久四年の天井新造、寛喜二年の附一重鳩居一重加増、并に文曆二年の石壇